

西谷幸介『宗教間対話と原理主義の克服』

——宗際倫理的討論のために——

(新教出版社、二〇〇四年)

森本 あんり

本書は、読者にすばらしい学びの機会を与えてくれる。それは、本書が著者自身の辿った学びの道程を記録したものであるからである。著者の読書や研究の深まりに沿って、問いの設定から答えへの模索へ、そしてさらなる問いと答えへと、読者を着実に案内し、その深まりとともに味わわせてくれるからである。はじめからすべての事象を見渡す高みに立って、最終解答を与えてしまうのではない。みずからも上を目指して敷をこぎながら登ってゆく、同伴者の案内書である。読者は著者とともに、うつそうとした文化の森の記述にしばしば道を探しあぐねながらも、なおしばし汗を流しつつ登ると、突然はらりと広やかな展望のあるところに出る。それが何度か繰り返される。これが「学ぶ」ことの醍醐味である。「ああ、そういう

ことだったのか」と膝を打つような発見をする。近頃の言い方だと、「満へえ」気分を味わえる。それが良書を読むことのご褒美である。本書を読むと、「読むクスリ」がよく効いて、他の本も読みたくなる。そこに取り上げられている本を、次々に読んで、どんな勉強したくなる。たくさんの枝分かれした問題提起に、自分なりの思索を開始するよう誘われる。あるいは本書から他の学問世界へと派遣されて、何だか知らぬ間に共同研究の一員に任命されたかのように、さらなる研究の課題を遂行したくなる。そういう一冊である。ぜひ一読をおすすめしたい。

*

上がりにも納得できない。はてどうしたのかと考えるうちに、リンドベックの『教理の本質』に出会う。ポストリベラルを標榜するリンドベックは、宗教を「認知的・命題的」「経験的・表現的」「文化的・言語的」という三つの類型で理解するが、この第三の立場に、著者は求めていたものを得たような共感を覚える。これは、宗教を一種の限定的な規則と捉える考え方で、偏狭な排他主義でもなく、かといって無責任な多元主義でもなく、自分の信仰の確信を維持しつつ、他宗教の真理にも開かれた態度を取ることのできる立場である。

しかし、著者の探求はそこで終わらない。この立場だと、諸宗教は「対話する」といいたながら、結局は自宗教の深化だけを目的とすることになってしまう。対話による自己変革を目指すにしても、文脈編入としての伝道を語るにしても、やはり自宗教の拡大と向上を図るだけの自閉的な態度に変わりはない。これまでも宗教間対話は主として西洋ないしキリスト教の側から呼びかけられて行われてきたが、そのように対話をしようにももたかけること自体が、結局は自宗教の目論見の押しつけと非難されることにならないか。そのように思い悩む著者に、い

ま一段の新しい光を与えたのが、ニッターの「未来にたいする責任——宗際倫理を指して」という論文である。そこでは、教会中心主義から救済中心主義へと焦点を移すことによって、通約不可能な各宗教の個性を尊重しながらも、その本文内存在性を越えてなお対話に積極的な意義を見いだす道が示されている。この対話は、解放の神学者ニッターによれば、諸宗教を横断する普遍的基準として、生態学的・人道的な福祉と正義を追求するものである。平和や自由、民主主義や人権、地球温暖化などという人類共通の運命にかかわる社会倫理的な問題を具体的な議題とするならば、宗教間対話は現下の停滞を脱して新しい意義を獲得するであろう、というのが著者の暫定的結論である。

文中に引用されているのは、外国の文献ばかりではない。「大木II古屋論争」や「滝沢II八木論争」など、本誌読者にはなじみの多い諸先生方の名前も数多く登場して丁々発止を展開してくれる。評者は、本書の議論の一段階ごとに納得し喜びを味わいつつ読んだが、読者の方々とともに、生態学的な宗際倫理を追求するという著者の結論にもう一段屋上屋を重ねるつもりでお伺いしたい。

本書の見取り図をごくごく大雑把に紹介しておこう。まず著者は、これまでの宗教間対話の実績を評価しつつ、そこに伏在する「宗教本質論的多元主義」に不満を覚える。これは、「キリスト教は他宗教をどう考えるか」に展開されているカブの議論を下敷きにしたものであるが、まず何かある普遍的な宗教の本質というものがあられ、諸宗教はそれを歴史的個性において具体的に表現したものだ、とする考え方である。著者は一人のキリスト教徒としてその安易な多元主義に疑問を感じるが、そうかといって、自己の宗旨だけが絶対的な真理だと主張するような「排他主義」の独善に戻るわけにもゆかず、他宗教にはもう少し開かれていたが最終的にはやっぱり自宗教こそが完全に最高の真理だと信ずるような「包括主義」の思い

それは、十数年前にアメリカの新聞で見た「こまの風刺漫画からの問いである。——瘦せた貧しいラテン・アメリカの農夫が、今晩の薪にと斧で灌木を切り倒そうとしている。そこへ、肥えたアメリカ人がでっかいメルセデスで乗りつけ、呼びかけるのである。「おい、そのあんたよ、その木は地球環境を守るために必要なんだ。」——豊かな第一世界に住む白人大学教授のニッターは、そしてわれわれ自身は、この風刺に何と答えたらよいのだろうか。

*

本書には、興味深い「付論」が二つ加えられている。なかでも「付論2」は、日本宗教学会の学会誌に掲載された論文の再録であるが、この論文で著者がほんとうに言いたかったことは、再録にあたって新たに付加された「補足説明」にある。そこには、「日本は多神教で寛容だが、欧米の宗教は一神教で不寛容」という、「わが国の識者の間でいまでも通用している見解」への痛烈な批判が述べられているからである。その例に挙げられているのは、梅原猛、佐伯彰一、塩野七生、養老孟司、岸田秀といった相変わら

ずのお歴々である。著者によれば、これらの人々は「一つの固定的で紋切り型の宗教観、つまり一神教と多神教の過剰に単純化された二分法に頼りながら、これまたあまりに単純な仕方でも東西世界の人々や文化を性格づけ、そうして、けつきよくは、日本的なもの優位性を厳密な研究や反省もなく無批判的に肯定あるいは吹聴している」(二二二頁)。性懲りもない彼らの発言には評者もうんざりしているが、どうだろう、本書を彼らに謹呈してみても、ただ、ここでも著者はあくまでも控え目で、反論そのものは評論家の加藤周一氏と国際日本文化センター所長の森岡正博氏に委ねておられる。

*

最後にもう一言。本書はとても読みやすい。それは単に、著者が学生を念頭において書いているからではない。ていねいな「ですます」調だからでもない。それは、文章の起句と結句、主語と述語、修飾と被修飾、主節と従節がきちんと対応しており、論理の構造にしたがった文章構造の切り分けができているからである。要らぬ所でつかえることなく、安心して読むことができるから

である。そんなことは学者なら誰もがやっている当然のことだ、と思われる人があつたら、試しに手近な書物を開いてみるとよい。文章の構造などはとんと気にかけて、その赴くままにさっさと書いている人も多い。それをいちいちチェックする編集者も少なくなつたのであろう。本書の著者は、自分の文章に責任をもち、気を遣いながら書き、おそらく推敲にも十分に時間をかけている。そうした地道な努力が、本を読むことの楽しさを倍加させてくれるのである。 ■

(国際基督教大学教授)

維持会員の募集 及び見本誌贈呈のご案内

小誌も創刊以来四〇〇号を超え、日本における教会形成と文化形成に奉えるという創刊以来の課題にますます取り組みたいと願っております。そのためにも形成委員会では、『形成』をお支え下さる維持会員を募集しております。維持会費につきましては、年会費一万五千元とさせていただきます、毎月五部發送させていただきます。

また見本誌をご希望の方には無料にてお贈りさせていただきます。

いずれもお問い合わせは滝野川教会(電話〇三三三九一〇)一九九七)までお願いいたします。